

ゴシップの渦中で共在する

—モザンビーク島の女性たちの近所付き合い—

松 井 梓*

Being Co-present in a Whirlpool of Gossip: Neighborhood Relations among Women in Mozambique Island

MATSUI Azusa*

In Mozambique Island, a tiny island on the Indian Ocean, gossip is pervasive among women in the neighborhood. In discussions of gossip in cultural anthropology, structural functionalists stress its function to maintain order in society through sanctioning one's behavior, while transactionalists emphasize the intentions of the gossipers, which can cause disharmony. However, this dichotomy may not accurately capture the picture, since the consequences of gossip can always be temporary and unfinished. This paper aims to show how island women are able to be co-present with neighbors in this small, densely populated island with intense gossip. Even though island women are embedded in such intimate neighborhood relations, where neighbors have strong interests in others and seek connection with them to exchange food, and where gossip is a major interest to them as well as a concern to those about whom it circulates, people tend to ignore the outcomes of gossip and do not care too gravely about gossip against themselves. What enables these attitudes is, firstly, the unique social space of co-presence in the island; neighborhood relations are densely knit, but they are also fragmented into small groups with fluid and changeable boundaries, making the circles of gossip temporary and uncertain. Further, although the island women seek connections with neighbors, they have an attitude of not giving themselves too freely to others nor requiring full trust or strong emotional connection with them. They are what maintain the co-presence of women in densely populated neighborhoods, through dissolving the functions and intentions of gossip, making them uncertain.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2021年1月22日受付, 2021年5月28日受理

1. はじめに

モザンビーク北部、スワヒリ海岸の南端に位置するモザンビーク島の女性たちは、自分たちの住む島がいかにかゴシップに満ちているかについて、「洗濯していても（あんなものを着ているのねと）ゴシップの的になる」「ほかのどの街よりも酷い」と語る。その濃密さは、かつて“*Ohánkawàni Wombípití*”¹⁾（島のゴシップ）と印字されたプリント布が作られてしまったほどである。

モザンビーク島は、ポルトガル植民地期には首都も置かれるほど栄えたが、その大きさは南北約 2.9 km、東西が最長で約 460 m、面積は約 0.89 km²（図 2）と極めて小さい。大陸とは約 3 km の一車線の橋で結ばれている。古くからインド洋交易で発展し、1498 年のポルトガル人の到来以降 1898 年の南部マプトへの遷都まで、同島は商業と行政の重要拠点であり続けた。しかし、近隣のほかの都市の発展や、独立、内戦を経て島は行政・経済的地位を失う。その固有の歴史と当時から遺る建築が評価され世界文化遺産に登録された現在、島は「ミュージアム」[Newitt 2004: 34] としての役割を担うのみとなり、保全の対象となっている。欧米人が経営する小さなホテルやレストランなども点在するが、雇用、生産額とも観光業の規模は小さい。過去に栄えた島の今日の経済を回転させているのは、船主と漁師たち、そして魚の卸売商たちである。その経済的衰退の一方で、特に独立後、内戦の戦禍を逃れて来た人びとや「人生を探して」移入した人びとにより、島は過密を極めていく。これが濃密なゴシップを生む要因のひとつである。

文化人類学の研究対象として、ゴシップは関心を集めてきた。グラックマンは、構造機能主義の立場からゴシップの機能に着目した。²⁾ 彼によればゴシップは、集団内の価値規範に基づき道徳的に許容可能な行為と逸脱した行為の境界を引き、その過程で集団内に葛藤を生むものの、直接的な対立に頼ることなく集団内の団結や異議の調整を可能にするという。加えて、ゴシップはそれぞれの価値規範によって境界づけられた複数のグループを含む、さらに大きな社

1) このプリント布は住民によれば 1980 年代に作られたもので、実物は現存しておらず、スペルは異なる可能性がある。

2) グラックマンを構造機能主義者とみなすか否かは、議論が分かれる。ラドクリフ＝ブラウンに代表される構造機能主義は、デュルケームの影響を受けつつ、さまざまな制度や活動が相互に関連しながら社会構造を作り出しており、またそれを維持する機能をもつと主張する。そして、これにより社会の均衡が維持されるとして、社会を静態的に捉えた。他方で、マンチェスター学派の始祖であるグラックマンは、社会の構造と機能を重視しつつも、社会の動態性に着目している。予定調和としての社会の安定と均衡を前提としていたラドクリフ＝ブラウンに対して、グラックマンは、社会の変化や利害調整のプロセス、文脈、そしてそこで生まれる葛藤に着目する。そして、葛藤を経たうえで、再び均衡状態に揺り戻す社会の機能を重視した [Werbner 1990: 157, 2020: 57-59]。マンチェスター学派は、旧来の構造機能主義との差別化やその修正を志向しており、その内部ではグラックマンの議論は構造機能主義とはみなされていない。ただし、ゴシップに関する文化人類学の文献では、彼の議論は構造機能主義に位置付けられている。よって、本論もこれらの先行研究に倣う。

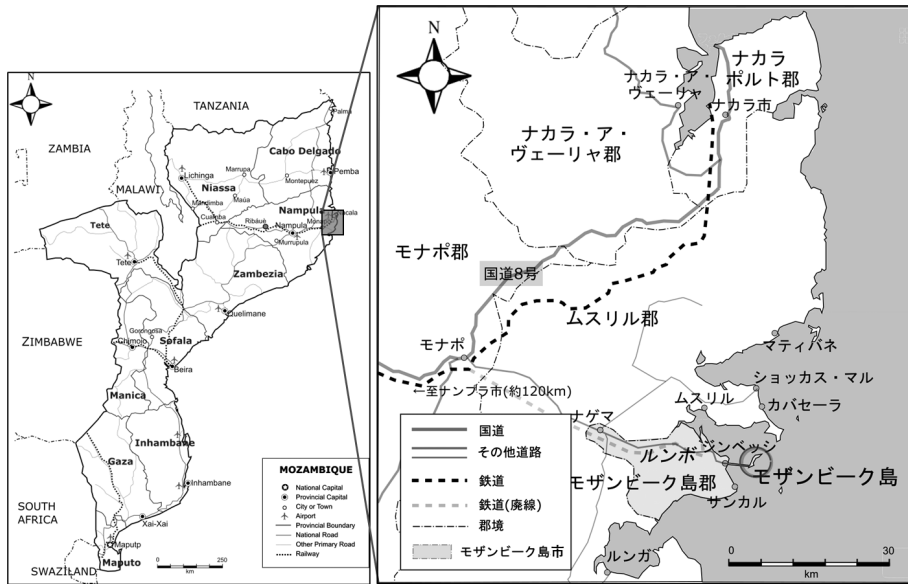


図1 モザンビーク島位置図

会に対しても調和をももたらすとした [Gluckman 1963: 313]. また、グラックマンと同じくマンチェスター学派に属するエプシュタインは、ザンビアのンドラの街に流れたあるゴシップの内容とそのネットワークを追った。そして、人がゴシップによって非難する逸脱行為は、社会全体が共有する価値規範よりもゴシップのターゲットや話者が含まれる集団（この事例では社会階層）単位の規範によって規定されることを示し、ゴシップのネットワークをつうじてこの規範が再生産される様子を描いた [エプシュタイン 1983].

他方、個人の行為や意思決定を重視するトランザクショナリズムの立場は、ゴシップを、行為者が経済的・政治的利益の獲得や保身、相手を陥れるなどの、自己の利害の調整というみずからの意図に基づく行為として捉える。Paine [1967] は、構造機能主義者はコミュニティの調和や統一感をゴシップの話者にとっての最重要の価値観であるとみなしており、この行為者の意図への視線を欠いていると述べる。そして、Abrahams [1970] は、これらのゴシップの機能と話者の意図は両立し同時に達成され得るとした。

ゴシップのもうひとつの重要な役割として、個人間や集団内の親密さを生む機能がある。進化生物学者のダンバー [2016] によれば、言語とは、霊長類が行なう毛づくろいに代わって、人が他者との間で親密さを築き集団内の紐帯を維持するために誕生した。霊長類の脳内では毛づくろいをされることによって脳内麻薬が生成され、これが相手のストレスを緩和し快楽を生むが、この身体的なケアによって群れのなかでの関係性が維持されている。ダンバーは、われ



図 2 島内地図

注) 第 2 節で詳述するように、島の南半分の 7 つの行政区から成る地域は、通称「バイロ」と呼ばれる。また、北半分のミュージウ地区は、「シダーデ」と呼ばれる。島内には 8 つの行政区がある。その行政単位もバイロと呼ばれるが、本論では地区と訳す。

出所：Forjaz José Arquitectos [2010] に掲載の地図を筆者が加工。

われ人間の発話の大半は社会的なことから情報交換、すなわちゴシップによって構成されていることを示し、ゴシップこそが社会的な毛づくろいとして人びとの間の関係を維持しているとした。

たしかに、他者についての会話は、話者と聞き手に快樂を与え、また相互の親密性を生む。私たちがゴシップをするとき、そこには聞き手との関係性を縮め、自己への承認を得たいという願望がある。しかしながら同時に、ゴシップという品のない振舞いは、非難や関係性の切断を招きかねない危険を伴うものでもある [Campbell 1964 など]。加えて、構造機能主義者もトランザクショナリストもゴシップの対象となった人の視点を重視してこなかったが、筆者がモザンビーク島の調査で確認したように、ゴシップはそのターゲットに深刻な被害をもたらし得る。Besnier [2009] は、会話分析を用いた相互行為論の立場から、これらの点も踏まえつつゴシップを個人が日常のポリティクスを行なうための手段として捉える。一見、個人の意図

を重視するトランザクショナルリストの視点に近いようにも思われるが、ベスニエは、意図や機能というゴシップの帰結はあくまでゴシップの副産物として捉えている。ベスニエが強調するのはゴシップの帰結ではなく、他者との日常生活のなかで、個人が周囲の人びとからその場の承認を得るための日々のポリティクスを為すための道具としてゴシップを用いる点である。加えて、後述するようにベスニエは、個人の意図の重層性やその達成の不確実性にも言及している。彼は、ツバルのヌクラエラエ環礁に位置する人口約 350 の小島で、島民たちのゴシップによるポリティクスのマイクロ構造を会話分析によって明らかにした。そして、話者が発話の技術を駆使してゴシップの責任を聞き手との間で分散させながら、ゴシップが孕む危険性 (danger) を回避し快楽 (pleasure) を引き出し、ポリティクスを行なう過程を詳細に描いた。しかし、ベスニエによれば、ゴシップによるポリティクスは常に未完 (unfinished) で不完全なプロジェクトである。すなわち、ゴシップの機能の帰結としてのグループ化や調和も、トランザクショナルリストが主張する、相手を陥れる／利益を得るという話者の意図の達成も、脆く、一時的で、不完全なものなのである [Besnier 2009: 119]。彼は、ある人のゴシップをしていた話者が話し終えてその場を去ったあと聞き手たちがその話し手を笑い者にしない保証がどこにあるか、と付言する。行為主体の意図は重層的で矛盾を孕んでおり、その意図に基づく行為の帰結も複雑に表れる [Besnier 2009: 190]。すなわち、ゴシップの機能も話者の意図の達成も、その成果は不確実なものであり、その後「どうなるか分からない」ものなのである。

本論では、小さな島で濃密に行き交う、隣人間のゴシップを対象とする。そもそも近所付き合いとは、日々近しく関わり合うなかで摩擦や軋轢が生じやすく、その関係は不確実さを孕むものである。中屋敷 [2017] は、北インド・スピティ渓谷の隣人関係について、時には親族関係を超越するほどの親しさを生む一方で、その関係性が不安定化する側面を、人びとの相互行為や語りから記述した。また、Bestor [1989] は現在の東京都品川区西部の隣人関係を調査した。彼によると、人びとはコミュニティや当該社会全体がもつ隣人関係のあるべき規範に基づいて付き合いを行なうのではなく、誰とどのような深さで近所付き合いをするのかは個人の自由選択に基づいている。そして、隣人どうしの互酬的な行為は自由選択の結果特定の個人との間の付き合いによって構築された、個別的な義務感に基づく [Bestor 1989: 206-207]。すなわち、ベスターの議論に基づいて中屋敷も指摘するように、隣人どうしの関係は、「基本的に戦術的にふるまいあう関係であり、かつ対面的に関わるなかで生まれた個人間の義務関係を含むもの」なのである [中屋敷 2017: 6]。隣人関係に対するこのような視点が現実に沿うか否かは、対象地域の特徴に拠ると考えられる。それでも、モザンビーク島の隣人関係を記述する際には、ベスターの視点は親和的である。というのも、まず島内での転居の頻繁さや島外からの移入者の多さから、近隣に住む人の多くは親族でも友人でもない単なる「隣人」であり、その場所での居住年数や親密度もまちまちである。そして、近所だから親しくしなければならない

という規範もなく、島民たちは隣人らと一対一の個別的な関係を結んでいる。そのようななかでゴシップは、女性たちの関係性への交渉の手段のひとつであり、またその帰結のひとつでもある。

だが、モザンビーク島の近所付き合いは、ベスターが調査した大都市の下町のような相互に関わりがありつつも一定の距離と無関心を保てるものとも、中屋敷の調査地である山岳地帯の自然環境に囲われた小さな集落やベスニエが調査した孤立した環礁の小集団社会にみられる、固定的な相手との濃密な付き合いとも異なる。後述していくように、モザンビーク島では親族でも同郷者でもない隣人たちが極めて稠密に住まう。それだけでも相手との物理的に頻繁な接触が生まれてしまうが、それに加えて島民たちは、隣人たちに関心をもち、ただでさえ密に住まう相手との繋がりを希求している。隣人の家を頻繁に訪れ、軒先のベンチや裏庭でお喋りをし、時に食べ物の授受をし、頼母子講のために毎日小銭のやり取りをする。ダンバーも述べるように、ゴシップそれ自体も聞き手との親密さの醸成を期待した行為である。だが、頻繁な接触は摩擦を生む。人びとは繋がりを求めすぎて、みずからしがらみを生んでいるようにもみえる。

この繋がりへの希求や濃密な相互行為は、固定的な隣人関係に基づく村落社会でもみられるであろう。しかし、「他者に親切で温和」であるべきとされ、「いつも笑顔でいる」「幸せそうに見える」ことが最大の賛辞である [Besnier 2009: 134-135] というヌクラエラエの、婉曲表現も含むゴシップと比べると、モザンビーク島のゴシップは多分にあけすけで直接的である。村落社会でこのようなゴシップが濃密に繰り広げられれば、その快樂よりも危険性のほうが高まる。だが、それでもなお島の女性たちは、ゴシップの渦中で隣人たちと共在することができている。これが、どのような社会空間の特徴と人びとの身構えによって可能となっているのが、本論の問いである。

以上を踏まえ、本論の目的は以下の3点である。第一に、島の女性たちが、濃密であけすけなゴシップに傷つきつつも「放っておく」という構えをもっていることを示し、これによってどのように上述のゴシップの機能や目指された利益の達成に不確実性が生まれているのかを検討する。ただし、島のように隣人たちと濃密に関わり合う場所では、自分へのゴシップがなされてもその渦中に身を置き続けなければならない、それを「放っておく」構えをもつことは困難に思われる。よって、第二の目的は、それでもなおこの構えが生まれる、島の共在空間の特徴がいかなるものかを示すことである。それと共に、この共在空間が生まれた成り立ちも明らかにする。そして、上述のゴシップへの構えを可能にするもうひとつの要因として、ゴシップが濃密に行き交う小さな島で常に稠密に隣り合って住まう女性たちが、いかなる対他的態度をもつのが重要な役割を果たしている。よって第三の目的は、島特有の共在空間で培われた、ゴシップの渦中にある女性たちの隣人たちとの共在の身構えが、いかなるものかを明らかにす

ることである。その際に、これらのことが島の歴史や自然環境、居住空間の配置、生業のリズムや食と、どのように絡み合いながら成り立ってきたのかを描く。島のゴシップの密度も、それを許容する島の人びとの共在の空間や対他的身構えも、歴史や環境との連関のなかで生まれたものなのである。これらを明らかにすることで、稠密に住まう他者に関心を寄せて繋がりを希求してしまう島の人びとが、ゴシップや摩擦、しがらみも生まれるなかでいかに他者と共にあるのか、そこには島の独特の社会空間やそこで培われた他者に対する身構えがいかに寄与しているのかを描く。

木村は、ある社会のなかで人びとが共にある態度や身構えを「共在感覚」と呼んだ〔木村 2003〕。そしてフィールドで観察された、人びとの共在や相互行為についての「態度の体系」から、我々は他者と「つながること、切れること、共にあること」について知る必要があると述べた〔木村 2003: iv〕。発話という相互行為の緻密な分析に基づき人びとの対他的な距離感を論じた木村の手法とは異なるが、本論もまた、モザンビーク島という稠密で小さな都市空間の住民たちのゴシップの社会関係や対他的態度の分析を基に、島の人びとの「共在感覚」を記述する試みのひとつだといえよう。

なお、本論は、ゴシップを「私的な状況で特定の集団内でなされる、ネガティブな評価と道徳的な内容を含んだその場にはいない第三者の行為についての言葉のやりとり」〔Besnier 2009: 13, 筆者訳〕とするベスニエの定義を採用する。ここでは、芸能人に関するゴシップなど、社会により広く流布するものは除く。また、ゴシップに似た概念として噂話や流言などがあるが、本論では対面的な集団内で特定可能な個人を対象とする発話のみを対象とするため、人物以外も対象に含み、また対面的な関係を越えて流布し得る、これらの概念は扱わない。なお、島で用いられるマクア語では、ゴシップと噂話は区別されず、両方に“ohánkawàni”の語が用いられる一方で、島民たちがこれらをポルトガル語で呼ぶ際には、特定の個人についての発話（ゴシップ）を“fofoca,” それ以外の事物もターゲットとなる発話を“rumor”あるいは“boato”と、区別して用いている。

本論で用いる事例とデータは、モザンビーク島で筆者が行なった2017年4～6月、2018年8～12月、2019年2～5月、2020年2～3月の計約10ヵ月の調査で得られたものである。調査はポルトガル語で行なったが、回答者がポルトガル語を解さない場合は、調査補助員にポルトガル語・マクア語の間の通訳を依頼した。島内で育った人びとは、高齢者を除き、多くがポルトガル語を話すことができる。³⁾ 調査地は、島の南半分を占めるバイロ（図2および第2節を

3) 筆者は、調査や日常生活に必要なポルトガル語能力を有している。また、のちの事例の登場人物であるE氏およびQ氏と筆者の間の会話の記録は、彼女たちがその場を去ったのちにすぐ書き起こしたものである。そのほかの語りは調査のなかで聞き取ったもので、その場でメモに書き起こした。

参照) と呼ばれる居住地域のうちのひとつ, A 地区⁴⁾ である。滞在先の世帯を中心に参与観察や聞き取りを行ない, 食の授受の社会関係および家への訪問者を記録した。2019 年には A 地区に住む全ての成人女性を対象に質問票を用いた量的調査⁵⁾ を行なったが, 本論で用いる A 地区についての量的データは, 断りのない限りこの時に得たものである。また, 図表や写真の出典は, 断りのない限り筆者が作成したものであり, 用いられているデータは筆者が収集したものである。なお, 本論で扱う近所付き合いには, 近隣に住む親族との間の食の授受や訪問も含む。

2. モザンビーク島概要

モザンビーク島が属するナンブラ州の主な民族は母系制をもつマクアの人びとであり, モザンビーク島とその周辺の沿岸部に居住する人びとはマクア・ナハラと呼ばれる。ナハラの人びとの多くはムスリムで, アラブ・スワヒリ系やヨーロッパ系との混血である祖先をもつことが多い。スワヒリ文化や植民地統治の影響を受けており, ナハラの語彙にはスワヒリ語やポルトガル語も含まれる。ナハラ (Naharra) という名称は, 彼らに対する内陸のマクアによる蔑称である “*muaharramo*” (雑種, 非嫡出子, 娼婦の子どもなどの意) という語に由来する [Cachat 2018: 71]。しかし, 今日多くのナハラの人びとは「文明化された民」[Abade 1956: 152] と称されたナハラであること, また特に 500 年以上の歴史をもつ古都に生まれたことを, 誇りをもって語る [Cachat 2018: 71]。

こうした特異な歴史をもつ島に, 解放奴隷や港湾労働者などの「原住民」⁶⁾ が自分の土地をもち住居を構えることを許されたのは 1866 年である。それまで「市域の外側」として屠殺場や採石場, 石灰窯, 火薬庫などが立地していた島の南部に, これ以降, この「原住民」の居住地区が形成された。その後, 居住地区は急速に拡大し, 1960 年代頃までには島の南端まで住居が埋め尽くす現在の景観が生まれた。

今日, 島の南半分 of 7 つの行政区から成るこの居住地区を, 島の人びとは「バイロ」(Bairro, 英語で neighborhood の意) と呼ぶ。バイロという通称には, この地域は市域の中心部ではなく低階層の人びとの居住地であるという含意があり, 北半分のミュゼウ地区の通称である「シダーデ」(Cidade, 英語の city と同義) と対比的に呼ばれる。住民たちはバイロとシダーデを

4) 調査対象地区の選定に先立ち, バイロの各地区の長に対して聞き取りを行ない, 各地区間で住民の経済状況, 職業・生業, 出身地に関し大きな差異がないことを確認した。よって, A 地区の住民は, バイロ全域の代表性を一定の程度有しているといえる。

5) 量的調査では A 地区内の全ての成人女性を対象とした。調査対象に該当する 223 名の女性のうち調査を受け入れてくれたのは 169 名で, 質問票の回収率は 75.8%であった。

6) 1928 年に *civilizados* (文明人), *assimilados* (同化者), そして *indígenas* (原住民) の三階層を区別する法令が制定され, 文明人/同化者のみが島の北半分のシダーデに住居をもつことが許された。



写真（上） 島の北部に位置する旧市街（シダーデ）



写真（下） 島の南部，中流／下流層の居住地区（パイロ）

写真1 島内の景観

エリアとして明確に区分している。なお、7つの行政区の集まりとしてのパイロには行政的な地位はない。シダーデはミゼウ地区というひとつの行政区であり、これを合わせて島内には8つの行政区がある。

対岸から橋を渡り島の南端に入ると、道は3つに分かれる。パイロの中央を南北に直線に貫くものと、島の東側と西側の海沿いをそれぞれ南北に走るもの、それぞれブロック舗装の道路である。これらと垂直に交わりパイロを東西に横断する、同じくブロック舗装の道が3本走っている。これらの道が、パイロをそれぞれの行政区に区切る（行政区は合計7つであるが、キラヒ地区とサント・アントニオ地区の境界には舗装道路はないため、舗装道路によってパイロは6つの区画に区切られる）。車がようやくすれ違うほどの道幅だが、通り過ぎる車はさほど多くはなく、シダーデに住む富裕層の車両か、周辺の町とを行き来する乗合バスがほとんどである。パイロの住民たちは専ら、この道路を歩いてほかの地区やシダーデに足を運ぶために用いる。また、自家用バイクと、島外からの客や島の南北の移動を急ぐ客のためのバイク

タクシーが頻繁に中央の舗装道路を行き来する。

これらの道路はシダーデと同じ高さを走るが、各居住地区は道路よりも低く位置している。場所によって異なるが、道路と居住区の間には、一段の高さが 20~30 cm ほどの階段で 5~10 段ほどの高低差がある。これは、バイロでは遅くとも 1800 年頃までにシダーデに建てられた要塞や家屋の建築に用いる石や石灰石の採石が始められ、採石後の低くなった土地に今日の居住空間が形成されたためである。舗装道路をふちとして 6 つの巨大な四角い穴が掘られ、そこに住居が敷き詰められたような景観を呈している。舗装道路が連続的な生活圏を区切るため、住民たちはバイロの各行政区内の居住空間を、手軽な往来や交際のひと続きの範囲として認識していると考えられる。特に、バイロの東半分（筆者の調査対象 A 地区を含む）では、居住空間の拡張と共に植民地政府による居住空間の計画がなされ、ひとつの地区内の住居や路地が直線的に配置された。また、各住居は等間隔に配置され、家々の間に細い路地が張り巡らされたことから、地区内では各戸への最短経路での徒歩移動が可能である。⁷⁾ このことから地区内の人々の往来は頻繁であり、自宅から離れた場所に住む相手でも、少なくともその家の住人の顔は知っていることがほとんどである。

1980 年代後半には、内戦の戦禍を逃れる人びとの周辺地域からの流入により、各住居に居住する人数や家族の数が急増した。今日ではバイロの人口の約半数は島外からの移入者で構成されるとみられ、A 地区での調査によると、成人女性の有効回答⁸⁾ 167 人中 81 人 (48.5%) が島外生まれである。バイロ全体の居住地の面積は約 0.267 km² であり、各地区の長への聞き取りによると 2018 年のバイロの人口は 10,829 人、人口密度は 40,582 人 / km² と非常に高い。人口流入により部屋単位で賃借する人が増えたが、これらの賃借人の転居は頻繁であり、バイロの居住には流動性がある。⁹⁾

バイロ建設当初から存在する住居は茅葺きで、壁は漆喰で塗られ、スワヒリ様式の間取りをもつ。そのほとんどが、8~10 m 四方ほどの小さな家である。中央部は、表口に面した「男性の居間」と、家族の食事処でもある「女性の居間」[Sollien 2013: 49] に分かれる。その先には調理や洗濯の場である、ポルトガル語でキンタリオ (quintálio) と呼ばれる土間がある。土間は塀に囲まれ路地からは見えないことが多いが、路地とを隔てる勝手口は在宅中は半開きに放たれている。この中央部を取り囲むように、家の四つ角に 4 つの寝室があり、それぞれの部屋に核家族ごとに居住することができる。

地区の長によると、A 地区には 2018 年時点で 1,274 人が居住する。また 2019 年 2~5 月

7) これは、無秩序に小屋が密集した居住空間が形成されることにより治安の悪化や火災を懸念した植民地政府が、家と家との距離や小道の幅などを条例により規定したことによる。この内容は、1892 年の市議会で以前の条例の修正が承認されたのち、1899 年に新たな条例として追加された。[Sollien 2012: 6; Corrêa 1940: 93].

8) 当該設問に対して不適切な回答や、回答漏れは無効とした。

9) 転居の要因として、家主や同居人との関係の悪化や、家賃の滞納などがある。

表1 A地区における家屋当たりの核家族数

家屋内に住む家族数	該当核家族数	
1	52	(19.3%)
2	70	(26.0%)
3	54	(20.1%)
4	60	(22.3%)
5	20	(7.4%)
6	6	(2.2%)
7	7	(2.6%)
合計	269 核家族 (全 126 家屋)	

*1 家屋当たり平均 2.13 核家族。

の筆者の調査によると A 地区には全 126 戸の家屋があり、269 の核家族が居住している。1 家屋当たりに居住する核家族数を表 1 に示す。本調査について核家族単位で集計したのは、島の周辺を含むモザンビーク北部農村部のマクア社会では、1 軒の家屋に 1 つの核家族が居住することが一般的であり、この住み方と比較して島の特徴を示すためである。これにより、どのような関係性にある核家族どうしが共住し、食を共有しているのか/いないのかを明らかにすることができた。ここでは核家族を夫婦もしくは成人の独身男性/女性、いる場合は未婚の子どもから構成される家族とする。

1 軒の家屋に共住する家族・世帯は、親族どうしの同居であることも、非親族が部屋を賃借し、同居することもある。特に、妻方の母系親族どうしで住居を共有する¹⁰⁾ 際には食費を共同で負担し（もしくはどちらか一方が負担し）、ひとつのかまど（パイロでは可動式のかまどが主に用いられる）と鍋を用いて調理をすることが多い。他方、非親族どうしの共住ではそれぞれのかまどと鍋で別々に調理した料理を皿に盛って交換する例が多くみられる。A 地区の 269 の核家族のうち有効回答を得られた 267 の核家族について、共住相手に親族を含むのは 156 核家族、非親族の核家族を含むのは 99 核家族であり、非親族も共住相手として重要な位置を占めることが分かる。このように、島の人びとは多様な関係性にある相手と共に住まい、同じ家屋で家族や親族と生計を共にし、非親族とも食事のやり取りを行なう。このような共住と住居内での食の授受のあり方も、近所との付き合いや食のやり取りの関係性に影響を及ぼしていると考えられる。

今日の島の主要産業は漁業であり、島の男性人口の約 4 分の 1 が従事する。A 地区住民の

10) マクア社会は母系であり、伝統的には妻方居住婚をとり、核家族単位で住居を構え、母系の直系三代の拡大家族単位で居住地を形成するといわれたが、そのあり方は農村部でも 19 世紀末には既に大きく変化している [Medeiros 2007: 85-86]。モザンビーク島は、イスラームの影響を受けており、また居住地が狭小であることから、上述のように居住様式は伝統的なそれとは全く異なる。しかし、祖母を起点とした母系リネージでの妻方共住を 선호する傾向もみられる。

男女別の職業・生業は図 3 のとおりである。多様な業種に細かく分業が進んでおり、都市的な生業構造といえる。また、全ての世帯が現金収入に頼っており、その大半は少額の日銭を稼ぐその日暮らしをしている。漁師らが得た、富の源泉である漁獲が卸売商によって遠方の都市で現金となり、島にもたらされたのち個々の商売人たちによって小さな島内を循環する。他方で、女性についてみると無職が多いが、島には女性の戸外での労働を抑制するような規範はみられない。より大きな都市で仕入れた商品売る小規模のビジネスを行ったり、調理した料理を路上で売ったりする女性も多くみられる。

3. 小さな島のゴシップ

本節では、バイロのゴシップがいかに濃密であけすけであるのか、その特徴はどのように生まれたのかをみていく。そして、このように濃密なゴシップが自分に対してなされたとしても、女性たちがそれに傷つきつつも「放っておく」という構えをもつことを示す。

第 4 節で詳述するが、バイロの親密な近所付き合いの範囲はいくつもの小さな交際圏に断片化されており、その境界は短期的に変化する。ゴシップは、近所付き合いの交際圏の関係性の切断と接続の要因となる。

3.1 島のゴシップが濃密になるまで

植民地期の島のゴシップの様子が分かる、ある女性の語りがある。

「昔はもっと島の人たちの間に尊敬があったし、愛があったのよ。他者への配慮もあった。…昔〔植民地期〕は、たとえば夫にもうひとり妻がいることを知ることはできなかった。ほかの人がそれを見ても言わなかったからね。もしそれを誰かに話したら、刑務所に入らないといけなかったのよ。ゴシップをするのは、とても危険なことだった。各地区に警察官がいて見張っていたの。¹¹⁾ 男女関係についての秘密だけではなく、ほかのどんなゴシップもしてはいけなかったんだよ。」(2019 年 4 月 1 日, 57 歳女性)

植民地期はゴシップが今日よりも少なく、島民が他者の秘密を守っていた旨は、ほかの高齢女性たちも同様に語った。独立によりこの取締りが解かれたことに加え、人びとの語りによれば、内戦中に周辺から「洗練されていない」多くの人口が流入したことで島の人びとの振舞いは変化したという。出身地の異なる、親族でもない他人どうしの密な共住は、他者の出自や振

11) 具体的な条例等は未だ見つかっていないが、植民地政府は行政機能と目と鼻の先に住む住民による反抗などの企てを恐れ、秘密裡の会話や集会等を規制していた可能性がある。別の女性は、この見回りをしていた警察官は、シパイオと呼ばれる植民地行政によって雇われたアフリカ人警察〔船田 2007〕であったと語った (2019 年 4 月 5 日, 70 歳女性)。

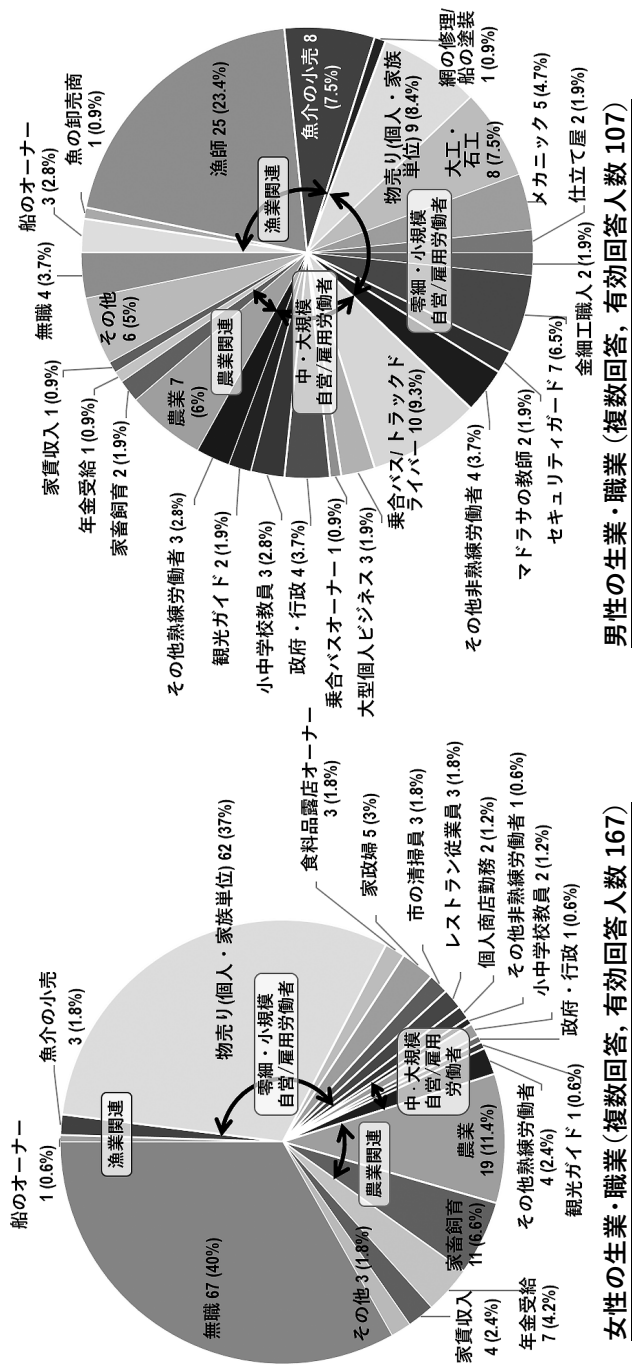


図3 A地区住民の男女別生業・職業内訳

舞いを擲擧することを含めた遠慮のないゴシップを生む。だが、島が昔の栄華を失った今でも、島生まれの女性たちは「洗練された」ナハラとしての振舞いを忘れていない。昔から島で作られてきた金のピアスや指輪を身につけ、魚の墨でアイラインを引き口紅を塗り、ほんの数 m 離れたシダーデへ行く時には洗い立てのプリント布を身につける。そして、関心は自分の装いだけでなく、他者の装いや振舞いにも向かう。近所に島外からの移入者が越してくれば、周囲の女性たちはひとつおりの情報収集に出向く。

加えて、独立後、ポルトガル人の退避により港や工場、商社、行政府、そして彼らの邸宅内での多くの雇用が失われ、ゴシップのアクターである女性たちに「お喋りする」時間ができてしまった。それまで生活に余裕があった島民たちが職を失い、妬みも生まれやすくなった。農地もなく作物を自給することもできず、農作業に生活のリズムを規定されることもない。しかしながら同時に、飯田が「海への安心感」[飯田 2008] という言葉で形容するように、島には海がもたらす富があり、天候や季節による漁獲の変動はあるものの厳しい困窮は生じない。いざとなれば、浜に出て貝や砂金を拾い現金を得られる。このような生計の変動のあり方は、圃場をもつ農村とも、日々の収入の波が大きい大都市の貧困層居住区とも異なる。朝のパンとシャ（茶）を食べ終え洗濯を済ませた後と、昼食後から夕暮れまで、夫が仕事に出かけたり、ふらりふらりと外を出歩いたりしている間が、お喋りのゴールデンタイムである。天気と漁獲の波に身を任せた、ほかに娯楽のない小さな島の間延びした時間のリズム／生計のリズムが、お喋りのため、そしてその台所を見るために、女性たちの足をよその家へと向かわせる。

さらには、植民地期に構築された、家々が整然と稠密に並ぶ小さな居住空間の構造も、ゴシップが生まれ流布するのに大いに貢献する。内戦中の過密化により、ひとつの住居に非親族を含む複数の家族が住まうようになり、家のなかの事情が漏れ出るようになってしまった。そもそも、薄い漆喰や竹の壁で囲まれた屋根のないキンタリオから、あるいはその奥の屋内から聞こえる話し声は、ひそめなければ家の四方に張り巡らされた路地に筒抜けとなる。その路地を、近所や周辺の住民たちが右へ左へと通っていく。路地と土間を隔てる勝手口は半開きで、近所の人はお喋りや借りものをしにノックもなく入ってくる。島でなされるゴシップには、「あの人に食べ物を乞われた」「あの人にこのような嫌なことをされた／言われた」など、相互に密に暮らし、日々接触するなかで生まれる不快感や摩擦を伴った他者の行為への非難や、「あの人のところではこんなものを食べていた（あるいは何も食べるものがないようだった）」など、稠密に住まうからこそ見えてしまう、勝手口を隔てた近所の暮らしの内実（自分より良い暮らしであれ悪い暮らしであれ）をさらすものが多い。地区内に張り巡らされた路地が人びとの足の運びに流動性を与え、これらのゴシップを流布させる。太陽が照りつける昼間は、屋外の木陰や女性の空間であるキンタリオの日陰、そして食事用のテーブルが、夕暮れ時には、夕涼みの場である路地沿いに点在するスワヒリ式の軒先のベランダが、ゴシップが生まれる場

所にほかならない。

3.2 [事例1] ゴシップに関する語り (1) —秘密は公になるもの

バイロの住民たちは、ゴシップを含めバイロで誰かに話した内容は、その相手が親しい間柄であっても、注意しなければすぐにその周囲に広がり公になってしまい得るものだと語る。そして自分が発した誰かについてのゴシップが広がってしまえば、それは自分に対するゴシップの応酬をも起こし得る。島に限ったことではないが、自分が発した誰かのゴシップの手綱を握り続けることはできない。女性たちはそれを頭の片隅に置きつつ、ゴシップをすることとなる。

「近所の人たちは、もし自分たちが何か乞えば色々な人に話してしまう。だから彼らに食べ物やお金を乞いたくないんだ。」(2018年10月26日, 42歳男性)

「昔はみんな秘密を守っていたのよ。でも今は秘密というものがなくなってしまった。」(2019年3月20日, 83歳女性)

「ここの人たちは秘密を守らないのよ。全部話してしまうの。だから、私はたくさんの人と喋ったりはしないの。ひとりを選んで話すんだよ。そうすれば、ほかの人に話が広がることもない。」(2019年3月9日, 47歳女性)

これらの語りは、バイロの女性たちは自分の周囲にいる他者を、自分の秘密を守ってくれる相手として信頼してはいないことを意味する。彼女たちは、気安く心の内を打ち明ければ、自分へのネガティブな語りと共にそれが第三者に話されてしまうことを意識している。

3.3 [事例2] ゴシップに関する語り (2) —ゴシップを「放っておく」構え

このように、ゴシップは交際圏を越えて公になってしまい、むしろほとんどの場合ターゲットの耳にまで入ってしまう。にもかかわらず、多くの女性が自分へのゴシップを「気にしない」「嫌だし辛いけど、放っておく」と語る。

「言われることもあるけど、見ていると『あの人にはほかの人のことを話すのが好きなんだ』と分かるから、気にしないようにするわ。」(2019年4月8日, 24歳女性)

「それがゴシップだということが分かっているから気にしないのよ。」(2019年3月6日, 40歳女性)

「自分の耳に届いても気にしないよ。…島はこういうものだって分かっている。綺麗な服を着ても何か言われるし、ちゃんとした服を着ていなくても何か言われるの。何をしても言われるから、もう放っておくのよ。」(2019年3月21日, 28歳女性)

「みんな話さなきゃならない(話さずにはいられない)の。そういうものよ。何を話してく

れてもいい。右耳から入って左耳から出て行くからね。聞いても、静かにしてなきゃだめだよ。」(2019年2月28日, 65歳女性)

「自分のことを言われたりするけど、興味が無いし何を言ったのか聞きにも行かない。…私についてのゴシップをしてくる人たちは本当のことを言っているのではないと分かってるの。」(2019年3月22日, 47歳女性)

もちろん、全ての女性が「気にしない」と語れるわけではない。筆者に「気にしない」と語った彼女たちも、実際に全く傷つかずに受け流せるわけではないであろう。ゴシップをされるのがゆさやつらさを筆者に打ち明けた女性もいた。周囲との関わりや繋がりをつい求めてしまう島の人びとであれば、なおさらである。しかし、このような語りから島の人びとは、パイロで他者に対してなされるゴシップは必ずしも真実を語るものではなく、ゴシップがどう語られどう捉えられるかは、話者、聞き手、またターゲットとなる人の関係性の文脈に依存していると捉えていることが分かる。後述するが、パイロではこの関係性は不断に組み替えられるものである。そして、密な共住のなかで他者について「話さずにはいられない」島の女性たちが繰り返す、パイロを日々飛び交うゴシップを、傷つきはしても「そういうもの」だと放っておく女性たちの構えが見受けられる。

3.4 豊富なゴシップと「放っておく」構え

このような女性たちの「放っておく」構えは、ひとつには島の居住の稠密さと、それによるゴシップの量や拡散のスピードと関わっているといえる。カプフェレによれば、多くの関係のネットワークが結ばれている集団の内部は噂話で満ちやすく、また噂話は容易に流れる。他方で、集団が単なる個人の寄り集まりでしかなく内部の関係のネットワークがまばらであれば、噂は流れにくく行きわたるのに時間がかかる [カプフェレ 1993: 77]。そして、噂話とは必然的に束の間のもので、その味わいは別の新鮮な噂話によって急速に失われる [カプフェレ 1993: 138]。すなわち、関係の網の目が密で噂話が豊富に生まれる空間では、それはすぐにほかの噂話によって置き換えられるのである。この議論は、島の女性たちがみずからへのゴシップをも「放っておく」の構えを説明する手がかりとなり得る。すなわち、彼女たちがこの構えを取るのには、ひとつには、パイロ特有の空間と時間の流れのなかで毎日のように生まれるゴシップは、しばらくすればほかのゴシップに取って代わられると知っているためであろう。

しかし同時に、ゴシップとは顔が見える小集団内でなされる特定の個人へのネガティブな評価であり、その影響は、対面的な関係にないターゲットも含む噂話よりも長引くといえる。話題自体は次のものにとり替わられても、ネガティブに語られたその人への評価は残り、ターゲットとなった人はそれを抱えたまましばらくその場所で暮らすこととなる。さらには、島のように隣人と密に関わり合って暮らす、他者のなかに常に身を置かなければならない状況で

は、新たなゴシップが次から次へと生まれていくにしても、みずからへのゴシップを「放っておく」ことは難しい。それが可能となるのは、関係のネットワークがまばらであると同時に他者と深く関わる必要がない、大都市のような冷めた近隣関係のなかであろう。それでは、なぜ島の女性たちがゴシップを「放っておく」構えをもつことができるのか。それは、隣人との付き合いの濃度や関係の構造、その変転の動態を含む、パイロの特有の他者との共在の空間のあり方と、この空間を生きるなかで生み出された、女性たちの他者との共在の身構えにかかっている。これらの点について、第4節でみていく。

4. パイロの共在空間と、みずからを他者に委ねすぎない身構え

まず4.1節で、ふとしたきっかけから食の授受を行なうほどに隣人との繋がりを求め、濃密な近所付き合いがなされる一方で、その関係が変転し流動的でもある、パイロの社会的空間の特徴を記述する。そして、このような空間のなかでこそ、ゴシップが豊富に生まれる一方でそれを「放っておく」構えも生じることを示す。つづいて、4.2節でゴシップの事例を取り上げたのち、この濃密なゴシップのなかで隣人たちと密に住まうことを可能にする、女性たちの他者との共在の身構えがいかなるものかを明らかにする。

4.1 関係が密でありながらも流動するパイロの共在空間

まず、パイロの食の授受や頻繁な相互の家の行き来を含む親密な近所付き合いの社会関係がどのような地理的範囲に及んでおり、そしてその関係はいかに継続し、また変化し得るのかを示す。なお、本論で取り上げる事例は筆者の滞在先E家（図4中、T/Eと記載のある住居）と近隣の女性らとの間で起こった出来事の記録である。E家は妻E氏（28歳、18歳で婚入し2011年よりこの家に居住、以下E家構成員についてはいずれも2019年調査時の年齢）とその夫T氏（43歳）、および夫の連れ子の女兒h、¹²⁾夫婦の子どもである男児e（共に小学生）の4人家族である。住居は夫T氏が父親から相続したもので、T氏が所有する。T氏はこの家で、E氏は直線距離にして約170m、徒歩3分ほど離れた実家で育った。E氏は母親が経営する小規模な幼稚園の教員をしている。T氏はオーダーメイドでアクセサリーを作る金細工職人であり、兩人とも稼ぎは不安定である。

4.1.1 [事例3] 変転する社会関係

E家を頻繁に訪問する人物¹³⁾や食べ物の授受を行なう相手などの親しい近所付き合いの社会関係の変遷をみていく。2017年5月に3日間行なった調査の結果、近隣のうち食べ物の授

12) 成人と子どもを区別するため、成人の氏名の記号表記には大文字のアルファベットを用い、子どもの氏名の表記には小文字のアルファベットを用いる。

13) 本論では隣人との間での食の授受および家への訪問の記録のみ記載しているが、これ以外にも、パイロ内の別の地区に住む親族や友人との間の食の授受や訪問もみられた。しかし本論での議論の対象外であるため、ここでは記載をしていない。

受が最も多くみられたのは、勝手口側の2軒隣に住む夫T氏の母親A氏（与3件¹⁴⁾ 2017年当時およそ85歳、持ち家に居住）およびA氏と同居するそのひ孫のt（与3件、14歳女兒）、表口の前の道路を挟みはす向かいに住む非親族の女性I氏（与1件、受2件、27歳、借家に居住）であった。そして隣人のうち最も頻繁にE家を訪問したのは上述のT氏の母A氏（6回）であり、次いで勝手口側のはす向かいの非親族の女性Z氏（4回、37歳、持ち家に居住）、t（3回）、夫T氏の姉U氏（2回、63歳、持ち家に居住）であった。

しかしながら、2018年8～10月調査時にはこの関係は大きく変化していた。まず、2017年の調査時に頻繁に交際のあったZ氏、A氏とそのひ孫t、そしてI氏との交際がみられなくなっていた。A氏は2017年12月に亡くなっており、tはそれを受けて近所の親戚宅の家事を手伝うために引っ越していた。tの転居先はE家から直線距離で約40m、徒歩1分もかからないごく近所であったが、筆者の滞在期間を通しE家を訪れる回数は激減していた。Z氏は同じ場所に住み続けていたが交際がみられなくなっていた。

そして新たに、2018年4月よりE家に間借りを始めた独身女性Q氏（2018年調査時27歳）、および2018年に入ってから近隣に越してきた幼馴染の非親族女性M氏（同32歳）との頻繁な食の授受や行き来がみられるようになる。M氏の転入は夫との別居によるものであり、転入先はM氏の母親の持ち家である。当時、E氏と賃借人のQ氏は、基本的には各食事の材料の調達と調理をどちらかが担当し、相手の家族にも振舞っていた（4.2節を参照）。E氏はこれ以外にも家の外に食のやり取りの相手があり、2018年9～10月の9日間食べ物の授受の相手を調査した結果、多かった順にQ氏の両親（与9件）、M氏（受3件）であった。加えて、9日間の訪問者調査（但し食事調査とは期間が異なる）の結果、隣人のうち9日間で最も頻繁にE家を訪問していたのはM氏（7回）、次いで非親族の隣人H氏（6回、44歳女性、持ち家に居住）、V氏（5回、20代女性・関係性不詳）であった。

2019年3月には、E家の近所付き合いの相手は再び変化していた。4.2節で詳述するが、2018年10月にQ氏が借家から退去したことでQ氏との食事を分配し合う関係は既に解消されていた。また、頻繁に食物の授受やE家への訪問がみられたM氏は、別居していた夫とのよりが戻り、2019年に入ってから当初住んでいた隣の地区に戻っていた。M氏の転居先は近所であり、頻度は減少したもののE家への訪問は続いていたが、食べ物の授受はみられなくなった。そして新たに、E氏によると2018年12月末頃より、E家の正面に住む非親族の隣

14) 食事調査では、その日摂った全ての食事について、食材および調理済みの料理の授受や交換の件数を尋ねた。一度に1種類の料理・食材をある人からもらった／ある人にあげた場合は1件、一度に2種類の料理・食材の授受があった場合は2件を計上している。以降本文中では、E家が相手に対しあげた件数を「与」という文字の後に、またE家が相手からもらった件数を「受」という文字の後に記す。本分析で計上したのは皿に盛られた調理済みの料理、および、高価であるため「乞うのは難しい」と女性らが語る米、トウモロコシ粉、魚などの食材であり、調味料や茶葉などは含めなかった。

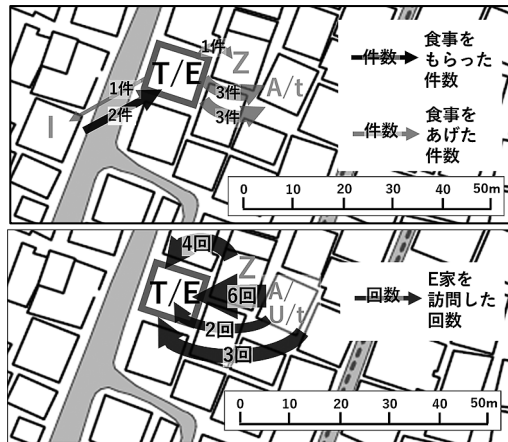


図4 2017年5月8～10日（3日間）の食の授受の記録／訪問者の記録

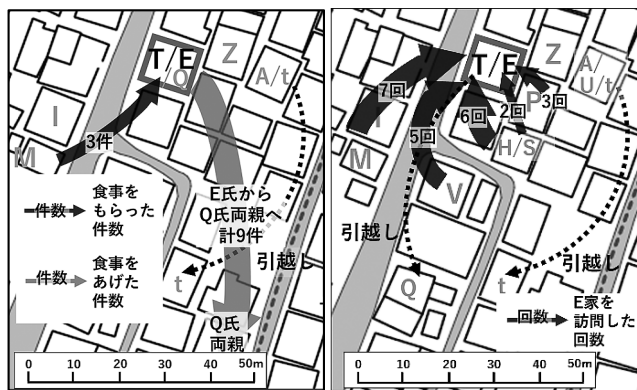


図5 2018年8月27日～9月1日，9月3～5日（9日間）の食の授受の記録／2018年10月20～28日（9日間）の訪問者の記録

人 R 氏（31歳女性，この持ち家に2015年より居住）との間で皿に盛った料理の交換を行なうようになっていた。2019年3月5～13日の間のE家の食べ物の授受の記録は図6のとおりである。R氏との料理の交換は，特に2019年3月にはほぼ毎日行なわれた（調査期間中は，与12件，受9件）。またR氏に加えてT氏の姉U氏にも，夫がおらず生計が不安定であるという理由から，毎日料理を皿に盛って子どもを遣って届けていた（同与9件）。

しかし，このR氏との料理の交換の関係も，2019年の半ばには解消されていた。2020年2月の時点では新たに親族ではない女性がE家に間借りをしており，この女性との間で，その時に手持ちがある方が食事を準備するという関係を築いていた。

隣人たちとの食べものの授受は，「あの家に食べ物がなかったから」という，ふとしたきっかけで始まる。そこにはもちろん純粋な善意もあるが，同時に，よその家の台所事情へ

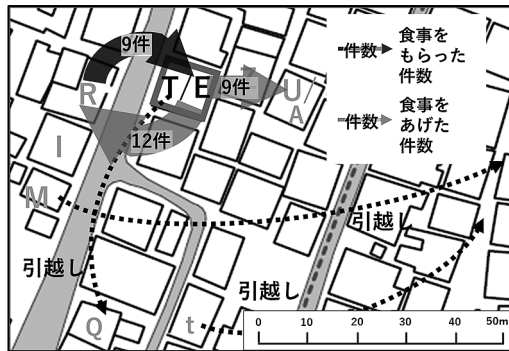


図 6 2019 年 3 月 5～13 日（9 日間）の食の授受の記録

の関心の帰結でもあり、また、繋がりへの希求があるからこそ起こる、相手との関係性を近づけていく行為でもある。他方で、このような近所付き合いの関係性が切断される要因は、①当事者間の関係性の変化（関係の悪化による切り離しや疎遠であった関係の接続）、②島内で頻繁にみられる転居（これは同居者や家主との関係の悪化に起因することもある）、③相互の食の分配はある程度均衡した互酬的なやり取りが求められるが、どちらか一方の経済状況の悪化により分配が一方的になり、のちに食の授受の関係が解消されたこと（これにより相互の関係性自体も悪化することがある）、の 3 点に要約される。そしてこの事例から、近所付き合いのなかで頻繁な相互の訪問や食の授受がなされる親しい交際圏は同居人であった Q 氏の両親を除き極めて狭い地理的範囲に限られていること、その関係は短期間で変化し、小さく断片化された交際圏の境界では切断と接続が繰り返されていることが明らかになる。

「交際圏」という語は、島の人びとが用いている言葉ではない。筆者が交際圏という言葉で意味しようとするのは、メンバーシップに基づく集団ではなく、その時々で頻繁な食事の授受や相互の訪問など関係性に基づく重層的なネットワークである。一番内側には食べ物の授受のネットワークが、その少し外側に相互の家を頻繁に訪問し合ったり土間やベランダで座ってお喋りしたりする関係がある。近隣でのゴシップ圏は、この交際圏のネットワークを内包しているが、その外側に住む、話者の親しい親族や友人なども含む。交際圏は自宅のすぐ隣を取り囲む家などの一定の小さな地理的圏内に収まっていることが多いが、¹⁵⁾ その地理的範囲は必ずしも連続的ではなく、隣の家が交際圏に含まれないことも、他方で飛び地的に 2～3 軒隣の家が含まれることもある。また、上で述べたとおりその境界は固定的ではなく時間と共に変化する。そして断片化という言葉は、ここでは交際圏に含まれる相手が上述のとおり自宅のすぐ隣を取り囲む家の住人などの狭い地理的範囲に限られており、バイロ全体がこのようなくつも

15) A 地区を対象とした質問票調査の結果でも、定期的な料理の交換や分配を行なう相手は、親族を除きその 6 割以上が自宅の 2 軒隣以内という地理的範囲に収まっていた。

の小さな交際圏に緩やかに分かれていることを示す意図で用いている。しかし、断片化されたそのひとつひとつは一定のメンバーシップを基にグループ化されているものではなく、個人間のネットワークの束であり、個々人によってそこに含まれる相手は異なる。

4.1.2 [事例4]「あの家の人のことはよく知らない」

2019年4月の調査時、E家の裏口側の通路を挟んではず向かいに住む女性P氏（36歳、1988～2001年および2010年から今日まで図7中Pと記載のある父の持ち家に22年間居住）は、隣人の軒先（図中人のマークの位置）に筆者と2人で腰を下ろし次のように話した。

「Eとは去年（2018年）まではほとんど話さなかった。お互い“おはよう”“こんにちは”と挨拶するだけだった。最近付き合いが始まったのは、互いの振舞いを見て親しくしようと思ったからだよ。」

—（筆者）こんなに近くに住んでるのにそんなことってあるんですか。

「あるわよ。（P氏の家を2軒先、矢印の先の家の軒先に座って休む人を指さしながら）だってあの家の人のことはよく知らないもの。」（2019年4月8日）

このP氏の語りからも、ごく近所の相手でも「よく知ら」ず、異なる交際圏に属することがあること、そしてふとしたきっかけからそれまで親しい付き合いのなかった相手との近所付き合いが偶然始まり、小さく断片化した交際圏の範囲は変化することがあると分かる。

4.1.3 [事例5]「すぐ近くの人と付き合うことよ」

また、別のある女性に近所付き合いの秘訣について尋ねた時、彼女はこう答えた。

「近所付き合いの秘訣は、すぐ近くに住む人たちと付き合うことよ。何か（食べるもの）を頼んだり、もらったり、遊んだりするのも。もし私がもう少し遠くに住んでいる人、たと

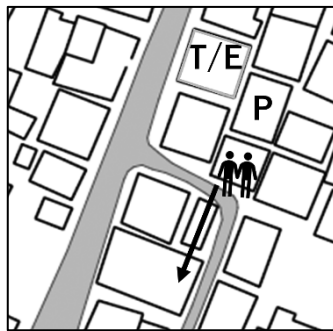


図7 E家近隣地図

例えばE家（移動距離にして約110m、徒歩1分ほどの距離にある）と付き合ったりすると、もっと近い家の人たちは悪く思うのよ。自分の噂話をしているんじゃないかと思ってしまうのよ。“あの人は何も持っていない（貧しい）”とか、“これこれを乞われた”とか言われているんじゃないかってね。」（2017年6月20日、45歳女性）

彼女のこの語りからは、バイロの人びとにとって自分の家の周囲の住人以外の、特に親族や親しい友人ではない相手と親しくすることが不自然に映り、それがごく近所の住人たちに不信感を抱かせ、不和に繋がり得ることがうかがえる。この語りから、隣人たちの間には、相互にその交際圏を狭くするような圧力が垣間見える。

4.1.4 共在空間の成り立ちと「放っておく」構え

以上の事例から、バイロでは隣人たちとの間で、頻繁な訪問や食べ物の授受をも含む、親密な付き合いが行なわれていることが分かる。気候の移り変わりや日々の天候の変化によって漁獲高は変動し、また農地はないため食物は全て現金で賄う。このことは生計に波を生み、それゆえに女性たちは食を授受する。ふとしたきっかけから始まるこの付き合いは、ゴシップと同様に、密に住まう相手への関心、相手との繋がりや関わり合いへの希求によっても生まれる。漁業以外目立った産業のない島で、おおよそ近い生計手段をもつ隣人の台所事情は関心の種なのである。そして、食の授受はゴシップや摩擦を生み、社会関係に変化をもたらす。

このような相互の濃密な関わりのある近隣関係では、みずからへのゴシップがなされてもその渦中に身を置き続けなければならず、それを「放っておく」構えをもつことは困難であろう。しかし同時に、バイロの近所付き合いの社会関係は流動的で淡泊でもある。すなわち、日々隣人宅を訪問し食べ物の授受も行なわれるほどに隣人に関心をもち密に関わり合う一方で、ひとつひとつの交際圏は小さく、また関係が固着することなく常に組み替えられており、その交際圏のすぐ外側との付き合いは薄い。大都市のような、希薄な近所付き合いでもなく、かといって、村落社会のような親族関係や地域社会の規範に基づく固定的な関係性でもない。隣人への関心や繋がりへの希求と、関係性の断片化や流動性を同時に併せ持つ。

構造機能主義は、ゴシップが集団内の規範を周知させ、集団の境界を強化して結束を高め、制裁による秩序をもたらすことを想定していた。だが、バイロの親しい交際圏は小さく断片化しており、その境界は組み替わるために、集団の境界強化や集団内での制裁と規範的秩序の生成は起こりにくい。この共在空間の動態こそが、次々と生まれるゴシップを「放っておく」、女性たちの構えを可能にするひとつの要因なのである。

このようなバイロの共在のあり方は、1860年代以降バイロが構築される過程で生まれた。バイロは、周辺地域からの移入者が順次土地区画の権利を得て形成されていったため、近隣集団は同郷者や親族ではない、他者どうしが密に住まう空間となった。そのため、関係性は親族

や同郷者どうしの規範や集団性ではなく、個人の選択に基づく。また、条例によって稠密かつ直線的に配置された住居と、各住居の間に一定の間隔を保つために家々を縫うように張り巡らされた路地は、隣人どうしの頻繁な接触と関係の親密化を促すと同時に、摩擦と疎遠化も生む。そして、頻繁な相互接触を伴う密な居住空間では、親密な近隣の交際圏は狭い地理的範囲に閉じていく。しかし、一定間隔をあけた稠密な住居の配置は、摩擦が起きたとしても、関係の組み替えを可能にする。家の四方八方を路地を挟んで家々を取り囲んでいるため、近所付き合いの選択肢が多く、事例でみられたようにある隣人との関係性が悪化しても、ほかの隣人と付き合いを始めることができるのである。さらに、人口過密により複数の寝室をもつスワヒリ式住居に複数の世帯で住まうようになり、部屋単位の賃貸も一般化した。居間や調理の場を共有しながらひとつ屋根の下に住まう大家と借家人の間には、不和がしばしば起こり、これも一因となってパイロ内での転居が頻繁となった。しかし、ある住居から転出する人を、別の住居の寝室が吸収する隙間がある。複数家族での共住、賃貸の一般化、複数の寝室をもつスワヒリ様式の住居の間取りが、関係性に流動を与えていった。

ここまで、ゴシップを「放っておく」という構えが、相互に関心をもち密な関わりを求めながらも、関係性の組み替えが不断に起こるという、パイロ特有の社会空間のなかで生じること述べ、この社会空間が成立した経緯や、空間配置の特徴を記した。つづいて4.2節では、事例に触れながら、ゴシップを「放っておく」構えを可能にするもうひとつの要因、すなわち、濃密なゴシップが飛び交うこの社会空間で、その関係が変転する隣人たちと生きることを可能にする、パイロの女性たちの他者との共在の身構えを明らかにする。

4.2 [事例6] ゴシップの渦中でみずからを他者に委ねすぎない身構え

ここで、上述のE氏とQ氏の関係の解消についての事例を検討する。2018年4月からE家に間借りしていたQ氏には婚約者がおり、Q氏は婚約者から金銭援助を受けていた。Q氏は、果物の実と砂糖を煮詰めて凍らせたアイス売って日銭を稼いでいたが、その稼ぎはごく少額であった。上述のとおり、当時E氏とQ氏は毎日、基本的には各食事の材料の調達と調理を分担し、相手の家族にも振舞っていた。E氏とQ氏は親族関係にない。非親族間では個別に材料を購入し、各々がもつかまど・鍋でそれぞれが調理し、皿に盛った料理を交換することが多いなか、どちらかといえば少数派の事例である。いずれにせよE氏とQ氏はこの時、食費に関する生計を同一にしているとはいえないが、仮に一方に持ち合わせがない時にはお互いに頼ることができた。調査期間中、9日間の調理の分担を記録したものが表2である。E氏が食事の準備を担当し、それをQ氏も食べた回数が11回（表中「E」および「E_{+Q}」）、Q氏が準備しE氏の家族もそれを食べたのは7回（表中「Q」および「Q_{+E}」）と回数に偏りがあるが、これはこの家にQ氏はひとりで住んでいるのに対し、E家の構成員は筆者と子ども2人を含めて5人であるため、むしろQ氏の実質的な負担が大きかったためであるといえる。

表 2 E 氏と Q 氏の間での食事の準備の分担 (2018 年 8 月 27 日～9 月 1 日・9 月 3～5 日, 9 日間)

1			2			3			4			5			6			7			8			9			
B	L	D	B	L	D	B	L	D	B	L	D	B	L	D	B	L	D	B	L	D	B	L	D	B	L	D	
Q	E	Q	-	E	Q	E	E	E	E	Q	E	-	E	E	E/Q	E	Q _{+E}	E	E	Q _{+E}	E	E	受	E _{+Q}	E	Q	E

注) B: 朝食, L: 昼食, D: 夕食

E 受: E 氏が人からもらった食べ物で取った食事 (1 回)

E/Q: E 氏の家族と Q 氏が別々に調理し別々に食べた食事 (1 回)

Q_{+E}: Q 氏が主に調理したが E 氏も自分で食事を買った・作り足した食事 (2 回)

E_{+Q}: E 氏が主に調理したが Q 氏も自分で食事を買った・作り足した食事 (1 回)

下段の網掛け: Q 氏が食べなかった食事 (6 回)

しかしながら, Q 氏との関係はその後 2 人の関係の悪化を受けて 2018 年 10 月 4 日に Q 氏が退去することで解消されることとなる。それ以前の 9 月 7 日, E 氏と Q 氏の関係に初めて違和感を覚えた筆者が E 氏に対し Q 氏と何かあったのか尋ねると, 以下のような返事があった。

「彼女はここで聞いたことをよそで話してしまう (すなわちゴシップをしてしまう) んだよ。あの家で話して, あっちの家でも話して, そこでも話して。家のなかで聞いたことをいろんな所で話してしまうのはよくないことだよ。…彼女がそうやってよそで話してるのを聞いた人が, 私に教えてくれた。アズサ (筆者) が今回この家に来る前 (8 月 17 日以前) からそういうことがあったのよ。」

E 氏の後日談によると, Q 氏は自分の方が料理の負担が大きいこと, また E 氏と T 氏の夫婦喧嘩の内容などを周囲に漏らしていたという。その後なんとか両者の共住は 1 ヶ月程度続いたが, その間に E 氏は Q 氏に関するこのような評価を近所の人たちに話し始めた。すなわち E 氏も, 「Q 氏が私についてゴシップをした」というゴシップをし始めたのである。その場に筆者を連れて行くこともあった。そして, E 氏は Q 氏と別々に食事の準備をするようになった。それは前述の表 2 にも表れている。表中下段の網掛けは E 氏が準備した食事を Q 氏が食べなかった日だが, うち数日は E 氏が Q 氏の分の食事を用意しなかったためでもある。Q 氏もそれを察知し, 自分の食べる分を別に作り始めた。10 月 4 日の朝, Q 氏は事前の通知もせず, 理由も言わずに突然家を出ていった。しかし, その引っ越し先は E 家のたった 4 軒先であり, 直線距離で 50 m もない場所であった (図 8 参照)。

転居先のごく近所に Q 氏の両親が住んでいるとはいえ, このような出来事があった後であれば, できるだけ当事者やその周囲の人たちと関わることをしない場所に転居するのではないかと筆者は考えていた。Q 氏の転居先は, 当時 7 組の家族がそれぞれの個室を賃借して住んで



図8 E家近隣地図

おり、これらの家族と庭を共有して炊事や洗濯をし、関わり合いながら過ごさなければならぬ場所であった。さらに、Q氏は退去の直後図中黒丸の位置で、近所に住むH氏（図中Hと表記されている家に居住）と座ってお喋りをしていた。だが、このH氏は当時、上述の2018年のE家への訪問者の記録に表れていたとおり、E氏の家を頻繁に訪れて物を借りるなどの近所付き合いをする間柄にある人物であった。E氏が直接Q氏についての非難を語ったかは明らかではないが、当然E氏がQ氏の行為を咎めていたことをH氏は知っていたはずであった。そして、H氏はこのようにQ氏と肩を並べて話していたかと思えば、その後もE家への訪問を続けていた。

Q氏が出ていった日、E氏と夫のT氏は筆者をソファのある居間兼客間に座らせ改まった態度で向き合った。筆者が何か尋ねる前に、E氏は上述のQ氏に対する非難を繰り返し、「今までほかにいろんな人を家に住まわせてきたけど、こんな問題は起こらなかった」と述べた。他方で、Q氏も転居後、筆者によく電話やSMSを送り、バイロで出会うたびにクッキーを焼いたから食べに来ないかと誘ってくれていた。E氏の悪口を吹き込まれるのではないかという懸念もありE氏の手前なかなか承諾できなかったが、数回の誘いの後、10月の中旬に意を決しQ氏の新居を尋ねた。しかし、Q氏はE氏との出来事には一言も触れなかった。自分や一人娘の近況、婚約者と結婚の準備を進めていることを話してくれた。

筆者がE氏との出来事を直接Q氏に尋ねたのは、ほとぼりが冷めたと筆者には思われた2019年4月であった。

「あの時はすごいひどいことされたの。私があの人たちのことについてゴシップして回ってるって言われたけど、それこそ私の方が自分がやってないことをあの人たちにゴシップされたのよ。あの人たちは人がやってないことについてほかの人たちに話すの。だから出てい

くことにした。」

— (筆者) ずっと聞いたかったんだけど、なんであんなことの後こんな近くに引っ越したの？

「ここが空いてるなかで一番安かったからだよ。」

— (筆者) でもここまだあの家からとても近いよね。たとえばこの近所に住んでる人たちと、Eさんの近くに住んでる人たちは、違うグループなの？ E氏があなたについてゴシップしてた時、この辺りに住んでいた人たちはあなたについて一緒になってゴシップしていなかったの？ それともここまでは及んでいなかったの？

「そう、ここはここ、向こうは向こう、違うグループ¹⁶⁾よ。この人たちは、私がここに越してくるまで私のことよく知らなかったしね。この人たちにはゴシップされてなかった。…最近ではE氏との関係も少し良くなったのよ。たくさん話すわけじゃないけど、挨拶したりね。¹⁷⁾あの頃は何も話さなかったよ。」(2019年4月4日)

以下に、この事例について考察を行なう。登場するE氏、Q氏、H氏の振舞いからも、3.3節で述べた、ゴシップを「放っておく」という女性たちの構えがうかがえる。彼女たちは、自分たちがしたゴシップの手綱を握り続けようとはしなかったし、自分の話を聞いてくれた女性たちにみずからを委ねることで聞き手をコントロールしようとはしなかった。ゴシップの行方も聞き手もコントロールしないのであれば、必然的に、話者や聞き手のグループ化／調和と規範の強化というゴシップの機能も、相手を陥れて利益を得るという話者の意図も、どちらも達成されない。E家のなかの事情を赤裸々に語るQ氏はその場の主導権を握り、誰もが知る人物についての不名誉なゴシップを周囲は喜んで聞いたはずである。しかし、その聞き手のうち誰かが、このQ氏の行ないをE氏に告げ口してしまった。幼い頃から島で育ったQ氏は、この可能性も頭の片隅で想定済みであっただろう。

また、上述のようにH氏は、E氏のQ氏への非難を知りつつもQ氏と2人で話していたかと思えば、その後もE家に足を運び続けていた。この場でE氏に関するゴシップがなされていた可能性は十分にある。H氏のこの振舞いからは、どちらかに肩入れしすぎない、どちらかの主張に寄りすぎない姿勢がうかがえる。

そして、Q氏とH氏が、E家のすぐ隣家の軒先、E家の勝手口から続く路地を通ればすぐに気付かれてしまうような場所に並んで座っていたのは、その姿をE氏に見られても大して

16) このグループという言葉は、筆者の言葉を用いてQ氏が発したものであり、実際に島の人びとの間で隣人間の関係性は「グループ」として認識されているわけではない。

17) 筆者が2019年2月に島での3度目の調査を始めた直後、Q氏がE氏の家を勝手口を開けて「政党の集まりに行く？」とその日あった与党の集会への参加を確認して行ったことがあった。

気まずくはないと考えていたためであろう。仮にE氏はその瞬間に通るかかっても彼女はただ一瞥して黙って通り過ぎ、少なくともH氏とはその後も通常どおりの近所付き合いを続けていくことが想定されていたのではないか。そうであるならば、筆者には近すぎるようにみえたQ氏の転居先も、Q氏にとっては自然な選択であったといえる。たしかに、Q氏がそこに越したのは家賃が安かったためであり、また、両親の家が近いことももうひとつの動機であった。しかし、3.3節の語りのなかで傷つきつつも「それがゴシップだと分かっているから放っておく」と語った女性たちの語りに表れているように、そこに共に住まうほかの家族やE家の周囲の人びとが、E氏だけに肩入れしてみずからをのけ者にするつもりはないのだと分かっていたからこそ、E家の隣でH氏と並んで話し、また見つけたなかで最も安かったこの場所に越したのは彼女にとってごく当然のことだったのである。

そもそも、Q氏は筆者を自室に呼んでもE氏を非難しなかった。Q氏が筆者に自室に来るように何度も声をかけ、クッキーを振舞ったのには、E氏と住まい続ける筆者に対し、自分とも少し向き合ってほしいという動機があったであろう。それは繋がりを求める態度である。それでもなお、Q氏はその場でE氏とのことについて一言も語らなかった。その振舞いには、筆者が今後もE氏と生活を続ける人間であることへの理解が滲んでいた。ゴシップや摩擦で疎遠になった関係もいずれ繋ぎ合わされるパイロの関係性を経験から知っていたからこそ、今後修復に向かうであろう関係性を、筆者を巻き込むことで再び悪化させない配慮があった。その場で交わされた近況や世間話は、筆者に身を委ねてしまったり筆者をみずからの側に寄せて相互の距離を近づけてしまったりするためではなく、挨拶もなく退去したことで開いた筆者との隙間を少し縮めて調整するように思われた。¹⁸⁾そしてE氏も、Q氏の退去後、筆者が尋ねない限り会話のなかでQ氏について触れることはなかった。

ゴシップが発話された場では、聞いている皆が嬉々として耳をそばだてる。だが、聞き手はそれを楽しみつつもその真偽や内容をまともに受け取らず、誰かの味方になる／どちらか一方に肩入れをするという明確な身構えをみせない。話し手は、相手のこの身構えや、発話の場で得られた承認のその後の行方をコントロールしようとしなない。そして、ゴシップのターゲットはみずからへのゴシップに傷つきつつも「放っておく」。¹⁹⁾その結果、自分の利益を達成する／

18) Q氏がE家に住んでいた当時、筆者とQ氏の関係性は良好であり、談笑しながら一緒に調理をしたり、Q氏の売り物のアイスの袋詰め作業をしたりしていた。

19) 木村 [1987: 211] は、トカラ列島に属するある狭小な島の社会関係について、『私とあなた』が今ここでどうつきあうかということと、『私と他の人』ないし『あなたと他の人』がどうつきあっているかを「顧慮しない」という態度を取ると述べる。木村はこれを関係性の「局所化」と呼ぶが、このように、島内に広がる社会関係がある場面ごとの対面的な関係性に区切り、それ以外の場面で自分あるいは相手がほかのだれと付き合うのかを問わないことにより、島民たちは関係の網が密な島の社会で生まれる軋轢を回避しているという。この構えは、モザンビーク島の女性たちが、発せられたゴシップの帰結を「放っておく」ことで、軋轢が生まれにくくなっていることと似ている。

相手を陥れるといったトランザクショナリストによって想定されたゴシップ話者の意図は解体され、集団内の価値規範の再確認を促し秩序を維持するというゴシップの機能もすぐに打ち消されていく。これは、ゴシップを含めて他者と濃密に関わるなかでも、他者に身を委ねてしまわない、島の女性たちの身構えによるのである。

以上のE氏とQ氏の事例から、5点を提示する。

第一に、島の女性たちにとってゴシップという行為は、その場その場の快楽や娯楽、自分への承認、他者との繋がりや親密さを求めて行なう、関係性の小さな駆け引きである。だが、時にそれは結果として、他者との関係に揺さぶりをかけてそれを調整し、関係の切断と生成を促す。E氏とQ氏との関係は疎遠化され、これまでの交際圏の境界は組み替えられた。Q氏とH氏、またQ氏と筆者との間には、これまでとは異なる文脈の関係性が生まれた。そしてQ氏は転居先で新たな近所付き合いの交際圏を構築するであろう。間延びした時間が流れる日々のお喋りのなかで、その場を楽しみその都度の承認を確かめながら、また、その結果不確実に小刻みに変転する関係を手繰りながら、女性たちはこの小さな駆け引きを繰り返していく。ベスニエが述べるとおり、その帰結は常に不完全なものである。

第二に、4.1節でも述べたように、人口稠密なパイロのなかでは上述のように親しい交際圏が断片化されていること、そしてその境界が不断に変化していることも、ターゲットが周囲の住民たちから広く排斥されることを防ぐ要因であるといえる。ベスニエは、ゴシップの機能と意図の一時性を指摘しつつも、他方でゴシップのターゲットのコミュニティ全体からの周縁化も起こり得ると述べた [Besnier 2009: Chapter 6, 7]。だが、今回の事例では、50m先のQ氏の転居先の住人らはE氏とは異なる交際圏に属しており、ここにはQ氏が入り込むことのできる別の隙間が存在していた。加えて、交際圏の境界が組み替えられていくことで、小集団のなかでターゲットへの非難や排除は維持され続けることなくほどこけていく。だからこそ、構造機能主義が想定していた、話者や聞き手で構成される集団の境界線を強化して結束を高め、調和をもたらすというゴシップの機能は果たされなかった。

第三に、3.2、3.3節の語りとも共通するが、パイロの人びとは周囲の他者との間でゴシップをされないような最低限の信頼に基づいた関係を結ぶことを、当初から期待していない。パイロでは自分がゴシップの対象となることは日常茶飯事で、島の女性たちはそれに怒り時に深く傷つく。繋がりを希求し、相手との関わりを求める彼女たちであれば、そしてそれが密に関わり合って住まう相手によってなされたのであれば、表面では気にしないと語っても、何もなかったかのように受け流すことはできない。しかし、島の女性たちは簡単に塞ぎ込んでしまったり怒りと傷に心を奪われてしまったりはしない。彼女たちは、「他人が語る自分の像」をコントロールすることを手放しているのである。繋がりを求めつつも、最後のところで他人と自分を切り離して捉え、自分について語る他者、あるいは自分が秘密やゴシップを語る相手とし

ての他者に対し、信頼しすぎはいけない、近づきすぎはいけない、みずからを委ねすぎはいけないという、共在の身構えをもっているのではないだろうか。²⁰⁾ 彼女たちは、ゴシップをされた程度で深く傷つくほどに相手に心を委ねた繋がりの方を、隣人たちとの間に求めているのである。それゆえに、相互の関係が断絶されてしまうような禍根は残りづらい。それは、相互に毎日何度も顔を見て声をかけ合いお喋りをする、ともすれば心理的紐帯も摩擦も生まれ得るバイロだからこそ、なおさら必要な身構えといえる。そしてこの身構えこそが、ゴシップを「放っておく」構えを可能にし、また、ゴシップの機能や話者の意図を解体させていくひとつの要因なのである。

第四に、極めて悪化した関係であっても、ほとぼりが冷めれば修復されていることも分かる。これは、日常的に顔を合わせてしまうような距離の近さと、島の女性たちの他者に身を委ねすぎない構えが、関係の決定的な切断を生まないために可能となっているといえる。不和を抱えたまま緊密に居住することは関係の不安定さを生むが、この不安定さを解消するように、関係の再接続が徐々に行なわれていた。

第五に、上記の点が成り立つ過程は、島が経て来た歴史、自然環境、生計のリズム、空間的な配置などとも連関している。ゴシップは、多くの働き口が失われた独立後の間延びした時間を他者と稠密に住まうなかで生まれた、他者と営む娯楽であり関係を調整する交渉である。ゴシップの帰結を不確実なものにする交際圏の断片化や変転は、ゴシップそれ自体に加え、居住の稠密さや空間配置の画一性、賃貸や転居の一般化、食の授受とそれが生む負い目や摩擦などに起因する。そして、他者に身を委ねすぎない身構えは、このような共在空間を生きるなかで培われたといえる。

5. おわりに—ゴシップの渦中で共在する

人びとが稠密に住まい、常に隣人たちの声が聞こえ顔が見えるバイロでは、放っておけば否応なく、他者との関わりが生まれてしまう。しかし、それは稠密さだけが要因なのではなく、

20) たとえば、かつて狩猟採集民として遊動していたタイ北部のムラブリの人びとを調査した二文字屋は、周囲との軋轢が生じた時やそれを防ぐ際に、遊動との連続性のなかで培われた人びとの身構えとして、「身を引く」という基本的態度があると述べる。それは、「強要されない」という非拘束性と、「一人で考え、一人で行動する」という個人の自律性が担保された状態であり、そのためには、「くつつかないこと」、すなわち「他者に干渉し過ぎずに、自らと他者とのあいだに一定の距離をおく」ことが必要であるという〔二文字屋 2020: 148〕。本論の事例とは地域も生業の形態も全く異なるが、ムラブリの事例との比較でいえば、モザンビーク島の女性たちの「他者に身を委ねすぎない」身構えは、遊動生活のなかから生まれたというよりも、狭小な地域への出身地が異なる者同士での稠密な定住生活のなかで培われたものといえる。加えて、島の女性たちの対他的態度は、ムラブリの人びとが相手を拘束せず、個人の自律を担保するあり方よりも、より干渉の志向が強い。島の女性たちは、他人に生活を干渉され首を突っ込まれ、観察の眼差しやゴシップによって拘束され、その自律性を脅かされてはいるが、最終的に他人に自らを委ねすぎないことで、その干渉や拘束を「放っておく」ことができているといえる。

バイロの女性たちが、日々存在をそばに感じ続ける隣人たちとの繋がりを求めてしまうからでもある。親密さやしがらみを生む食べ物の授受やゴシップは、その帰結である。しかし、繋がりがすぎてしまえば摩擦が生まれ、濃密なゴシップも生まれる。みずからへのゴシップも渦巻くなかで、女性たちは隣人と密に共在する。それを可能にするのは、バイロの女性たちの、自分が発したゴシップの手綱を握らず、他者が発したゴシップも真に受けすぎず、みずからへのゴシップをも「放っておく」という構えであった。それは、木村が旧ザイールのボンガンドの人びとに見出した、自分の発話が相手に届いているのかに無関心であり、また相手の一方的な発話も無視するという「関係性を切断する鮮やかさ」[木村 2003: 285-286]にも通じる。この構えによって、ゴシップは受け流されその意図や機能は解体されていく。

だが、密に住まう隣人たちに強い関心をもち、繋がりを求め、食べ物のやり取りまで行なわれるような、他者と関わり続ける空間では、みずからへのゴシップを「放っておく」構えをもつことは簡単ではない。しかしながらバイロでは、社会空間は小さく断片化されており、その境界は短期間で組み替わる。この流動性は、バイロの空間配置の構造によって促されているものでもある。バイロは、隣人への関心や繋がりを求め、日々の食の授受を含む緊密な近所付き合いがなされる一方で、その関係は流動し淡泊であるという、村落社会の関係性とも大都市のそれとも異なる、しかし双方の要素も併せ持つ、独自の共在の空間をもっていた。このような社会空間のなかでこそ、女性たちはゴシップを「放っておく」ことができるのである。

それに加えて、隣人たちと日々密に接し、相手と繋がろうとしてしまう一方で、最後のところで相互に心理的な結びつきや連帯を求めすぎたり、みずからを相手に委ねすぎたりしてしまわない彼女たちの共在感覚が、「放っておく」構えを可能にしている。この構えや共在感覚は、日常的に緊密な付き合いのある近所や職場で周囲にどう語られてもよいと割り切ることが得意でなく、少なくとも自身を悪く言われない程の信頼関係や心の結びつきを得たがる日本人のそれとは、少し異なる対他的態度である。だが、当初から相手に過度に期待し信頼で縛ることをしないからこそ、深刻な裏切りや不信も生まれない。

小川は、タンザニア都市部の古着商人らの間の関係性は、絶対に裏切らない、絶対に助けてくれるというような相手への信頼に基づいたものではなく、ビジネスライクな関係と過度に期待を寄せあう関係との間で親密さを調整しながら適切にバランスを保つという狡知に基づいたものであるという [小川 2011: 183-187]。そしてこの親密さを調整する狡知と、絶対的な信頼や裏切りに基づかない関係性こそが、持ち逃げなどによる取引関係の頻繁な解消と再開を含みながらも、都市で出会った他者との間の商取引慣行が全体として破綻せずに継続することを可能にしていた。モザンビーク島のゴシップの話し手にも聞き手にも、そしてゴシップのターゲットとなる人にも、密に関わり合いつつも「みずからを他者に委ねすぎない」という、繋がりのなかでもどうにか自他を切り離す身構えがある。毎日否応なく存在を近くに感じ、顔を合

わせ、家を訪れてお喋りをし、相手の作ったものを食べて自分が作ったものを相手が食べ、いざ食べるものがなくなれば多少は頼ることができるという関係性にある相手が短い期間で変転していくことは、負担の大きいことに思える。だが、この委ねすぎない身構えがあるからこそ、いずれ途切れることが前提となっているような、一時的な食の授受の関係性の変転のなかを生きていくこともできるのである。そしてこの身構えこそが、ゴシップの機能や意図を解体し不確実なものにすることで、ゴシップの渦中で女性たちが稠密に共在する空間を崩壊させることなく可能にしていた。

隣人たちに強い関心をもち、関わり合うことを求め、ふとしたきっかけから食べ物の授受まで行なうほどの繋がりを希求する身構えと、同時にそのなかで自他を切り離す身を委ねすぎない身構えや、変転し流動する共在空間とのバランスが、繋がりがすぎてしまう社会のなかでゴシップによる対立を持続させたり排除を貫徹させたりすることを阻みながら、小刻みに変転する女性たちの関係性を全体として繋ぎ合わせる確実性をも生んでいた。この確実性は、島を取り囲む海がもたらす富、島の地形、計画的に配置された家々と路地、そこへの人びとの稠密な住まい方、島で食べられる食物やその交換とも、複雑に絡み合っている。日々の天候や気候の変化は漁獲の波を生み、生計の波を生む。それゆえに女性たちは食を授受するが、これがゴシップや摩擦を生み、社会関係の変転をもたらす。しかし、海がもたらす漁獲のおかげで、生計の変動のリズム、そしてそれと共鳴する食の授受のリズムと関係の変転のリズムは、大きな不確実性を伴わない。酷い困窮や周囲との大きな貧富の差は生まれず、世帯間の格差の拡大ゆえにある相手との食の授受の関係が決定的に切断されることはない。さらに、居住空間の稠密さ、画一的に区画され配置された住居とバイロじゅうをめぐる路地、賃借と転居の多さは、頻繁な相互の接触や親密化を生むと同時に摩擦も起こし、交際圏の断片化や細やかで不均一なリズムでの関係性の変転を促す。それが、関係の変転のなかで生きるための、「みずからを委ねすぎない」身構えも生んできた。だからこそ、ゴシップは小さな範囲で完結し、時間と共に立ち消え、バイロの人びとの間の派閥化も起こりづらい。相互接触の頻繁さから、徐々に解消される不和もある。この、島がもつ生計と時間のリズム、そして空間配置は、バイロの共在空間や女性たちの共在の身構えと連関して、社会関係に細やかで不確実な変動を生む。しかし、その根底ではそれを包み込む、確実性の波を刻んでいるのである。

謝 辞

本研究は、公益財団法人村田学術振興財団平成30年度「研究者海外派遣援助」、国連大学サステイナビリティ高等研究所2019年「アフリカでのグローバル人材育成プログラム」、日本学術振興会特別研究員奨励費（2019～2020年度）の助成によって可能となりました。本論の執筆にあたっては、京都大学の高橋基樹先生、平野美佐先生、大山修一先生、太田至先生、高田明先生および南部アフリカ研究会のみなさま、そして査読者のお二人より貴重なご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

引用文献

未刊行資料

Corrêa, Pinto. 1940. *Relatório duma Inspeção Ordinária feita na Província do Niassa (1938-40), Volume II*. Arquivo Histórico Ultramarino, MU_Cx.1665-02/1B.

刊行資料

- Abade, Tarquínio. 1956. Ilha de Moçambique, *Boletim Geral do Ultramar* XXXII (372): 149–154.
- Abrahams, Roger D. 1970. A Performance-Centered Approach to Gossip, *Man*, n.s. 5(2): 290–301.
- Besnier, Niko. 2009. *Gossip and the Everyday Production of Politics*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Bestor, Theodore C. 1989. *Neighborhood Tokyo*. Stanford: Stanford University Press.
- Cachat, Séverine. 2018. *Ilha de Moçambique: Uma Herança Ambígua*. Maputo: Alcance Editores.
- Campbell, J. K. 1964. *Honour, Family and Patronage: A Study of Institutions and Moral Values in Greek Mountain Community*. Oxford: Clarendon Press.
- Forjaz José Arquitectos. 2010. *Island of Mozambique- Architectural Survey and Study on Local Vernacular Architecture, Ref. No. 513MOZ4001*. Maputo: Forjaz José Arquitectos.
- Gluckman, Max. 1963. Gossip and Scandal, *Current Anthropology* 4: 307–315.
- Medeiros, Eduardo. 2007. *Os Senhores da Floresta: Ritos de Iniciação dos Rapazes Macuas e Lómuès*. Porto: Campo das Letras Editores, S. A.
- Newitt, Malyn. 2004. Mozambique Island: The Rise and Decline of an East African Coastal City, 1500–1700, *Portuguese Studies* 20: 21–37.
- Paine, Robert. 1967. What is Gossip About? An Alternative Hypothesis, *Man*, n.s. 2 (2): 278–285.
- Sollien, Silje Erøy. 2012. The Persistence of the Myth of the Native Hut and the Cradle of Portugueseness on the Indian Ocean. In International Association for the Study of Traditional Environments (IASTE) ed., *Traditional Dwellings and Settlements Working Paper Series* 253. Berkeley, pp. 1–25.
- _____. 2013. Approaching the Macuti House: Identity and Heritage Conservation in Ilha de Moçambique. In Annika Seifert ed., *Global City - Local Identity?* Dar es Salaam: Mkuki na Nyota Publishers Ltd., pp. 48–57.
- Werbner, Richard. 1990. South-Central Africa: the Manchester School and after. In Richard Fardon ed., *Localizing Strategies: Regional Traditions of Ethnographic Writing*. Edinburgh: Scottish Academic Press, pp. 152–181.
- _____. 2020. *Anthropology after Gluckman: The Manchester School, Colonial and Postcolonial Transformations*. Manchester: Manchester University Press.
- 飯田 卓. 2008. 『海を生きる技術と知識の民族誌—マダガスカル漁撈社会の生態人類学』世界思想社.
- エブシュタイン, A. L. 1983. 「ゴシップ, 規範, 社会的ネットワーク」ミッチェル, J.C. 編, 三雲正博・福島清紀・進本真文訳『社会的ネットワーク—アフリカにおける都市の人類学』国文社, 105–118.
- 小川さやか. 2011. 『都市を生き抜くための狡知—タンザニアの零細商人マチングの民族誌』世界思想社.
- カプフェレ, J.L. 1993. 『うわさ—もっとも古いメディア 増補版』古田幸男訳, 法政大学出版局.
- 木村大治. 1987. 「小集団社会における『集まり』の構成」『季刊人類学』18(2): 172–216.
- _____. 2003. 『共在感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会.
- ダンバー, ロビン. 2016. 『ことばの起源—猿の毛づくろい, 人のゴシップ 新装版』松浦俊輔・服部清美訳, 青土社.

- 中屋敷千尋. 2017. 「隣人関係における親密さと不安定さ—北インド・スピティ渓谷におけるチベット系民族の事例から」『コンタクト・ゾーン』9: 2-33.
- 二文字屋脩. 2020. 「〈動き〉を能う—ポスト狩猟採集民ムラブリにみる遊動的身構え」(特集 不確実な世界に生きる—遊動/定住の狭間に生きる身体)『年報人類学研究』10: 134-154.
- 船田クラーセンさやか. 2007. 『モザンビーク解放闘争史—「統一」と「分裂」の起源を求めて』お茶の水書房.